Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

「よそ者」の効用」 : 「参加型開発」論に学ぶ「自立」と「当事者性」（時評・書評・展示評）

市沢, 哲

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,2:165-169

(Issue Date)
2010-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002393

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002393

時評・書評・展示評

Current Topics & Reviews

「よそ者」の効用

――「参加型開発」論に学ぶ「自立」と「当事者性」――

市沢　哲

二〇〇八年の地域連携協議会（於神戸大学）のメイン報告において、岡田知弘氏は、地域おこしには「若者・馬鹿者・よそ者」が必要であるという印象的な一句でその報告をまとめた。どんな形であれ地域おこしに関わった者なら、「なるほど」と言わずにはおられない指摘であった。

そのなかで、とくに私が関心を持ったのは「よそ者」の効用である。なぜならば大学に身を置く私にとって、地域連携センターの活動自体、「よそ者」である自分が地域に入っていくことを意味するからである（私が「地域住民」として参加している活動がないことはたいへん問題であるが、今ここではそのことを問わない）。当然、地域連携センターのなかでも、「よそ者」が地域に入る意味についてはしばしば議論になる。例えば、「よそ者」には地域の「しがらみ」がないので、新しい観点から活動を考えることができるのではないか、地域の歴史を違う観点から見直したり、参考となる他の地域での試みを紹介することができるのではないか、といったことが話題となる。これらは様々なフィールドで経験的に感じられることであり、岡田氏の講演が「なるほど」と思えるのも、このような経験に裏付けられているからである。

＊

地域連携活動と開発支援との間に何か通底する問題があるのではないかと考えて文献を探していた時、たまたま参加型開発の本に出会い、そこで「よそ者」に関するまとまった議論がなされていることに気がついた。とても興味深い議論で、今はやりの「自立」論に対する痛烈な批判にもなっている。地域歴史遺産保全活用基礎論の授業で紹介したところ、多くの学生が興味を示してくれた。若い彼らの問題意識とも響き合う議論なのであろう。

参加型開発についてはいろんな本が出ているが、私が強い

感銘を受けたのは、中村尚司氏の「当事者性の追求と参加型開発[1]」という文章だった。副題には「スリランカにみる大学の社会貢献活動」とあり、最初は大学の地域連携活動の参考になるのでは[2]、というぐらいの気持ちで読んだのだが、もっともっと深いところで人々の協働がとらえられていた。中村氏の文章には独特の深みがあり、直接文章を読んでもらうに越したことはないが、これまでの地域連携センターでの自分の活動経験を踏まえながら、参加型開発論から学ぶべきことを覚え書きとしてまとめておきたい。

＊

参加型開発論は国境を越えた開発援助のあり方を考える議論といえるが、ここでの「参加」は当該地域の人々の参加（事業の主要な担い手が地域の人々であることは大前提とされている）をいうのではなく、地域の外部の人間の参加をいう。つまり「参加型開発」とは、地域外部の人間、つまりここで考えようとしている「よそ者」が参加する開発のことである。以下、「よそ者」参加の参加型開発の意味を、「よそ者」を受け入れる側、「よそ者」として参加する側という、対になる二つの観点から中村氏の見解をまとめ、地域連携活動のあり方を考える糸口にしたいと思う。但し、この二つの観点はあくまで便宜なものである。「よそ者」を受け入れる側も「よそ者」として他の地域に入ることもあり、「よそ者」として地域に入る側も「よそ者」を受け入れる立場に立ちうる。私たちはいずれの当事者でもある。

＊

まず、「よそ者」を受け入れることについて、中村氏は「自立」という問題からその意味に迫っていく。いわゆる新自由主義の台頭以降、巷には「自己責任」や「自立」という言葉があふれかえっている。書店の店頭に積まれた自己啓発本は手を変え品を変え、日々更新され続けている。「自立」は自分の意志で実現することではなく、ほとんど他者から強要されている。そして、そこでいわれる「自立」とは、他者を交えず、何事も自分の責任において行うこと、である。

このような自立論に対して中村氏は、全く違う自立論を提起する。新生児は一人で生きられないし、高齢者も一人では生きられない。人間は所詮不完全な存在である。氏は先天性脳性小児マヒの小島直子氏の著書[3]から、車イスを押してくれる人が増えればふえるほど、押される側の選択肢が増えるの

であり、これこそが小島氏にとって孤立ではなく自立の方向である、ということを学びながら、次のようにいう。

一人ひとりが自分の課題をすべて自分で処理するのではなく、多くの人間、施設、制度などに頼る。頼る対象が多角化すればするほど、特定の相手に対する依存は少なくなる。その分だけ、特定の支配従属関係は少なくなり、対等で多様な相互依存関係の可能性が拡大する。異なった立場の人々と交流する可能性も、それに応じて増加する。逆説的にみえるかもしれないが、実は依存すればするほど自立するのである（二二〇頁）。

つまり、依存と自立は背反する関係にはない。依存することで、ようやく人は自立することができるのである。[4] 個人の自立だけではなく、地域の自立についても同じことがいえるだろう。地域の外に多くの依存関係を構築していくことは、地域の自立に必要である。「よそ者」が地域に関わる大学の地域連携活動も、地域自立のための依存関係の一つといえる。また、同時に私たちの側も自立するために、様々な依存関係を結んでいることにも思いを致す必要がある。

＊

続いて「よそ者」の側について考えよう。中村氏の議論では「当事者性」という考え方が「自立」とならんで重要な意味を持っている。中村氏はいう。「暮らしの全体性に迫りたいと考え、対象地域の人々と付き合い始めると、客観的な観察が困難になる」（二二二頁）。そこで、主体と客体の二分法を越えたより実践的な研究や活動の方法が必要となってくる、と。中村氏はそれを「主体と対象を組み合わせた、方法上の参加主義、あるいは当事者性の科学」（二二三頁）と呼ぶ。あるいは「研究対象と研究する当事者とが、明瞭に分かれない。私が何者であるか、つねに問い続けなければならない。私の生き方、私の社会的な活動そのものを私が研究する場でもある」（二二六頁）と述べる。

これは地域連携活動にも当てはまるであろう。私たちはまずは「専門的知識・技術」を持つ者として地域に入る。しかし、いつまでも地域を対象としてだけ扱っていたのでは、問題の本質に迫れない。そこで必要となってくるのが、「よそ者」が「当事者性」を自覚するということ、問題の「当事者」として地域に関わるということである。

＊

しかし、当事者といってもその問題のすべて引き受けるという意味ではない。先にみたように、地域は外部と様々な依存関係を結ぶことでより自立できるとするならば、「当事者性」を自覚するとは、自分が様々な関係の中の一人であり、そのような諸関係の中で活動する一人であることを自覚することといえるだろう。中村氏のいう「主体と対象を組み合わせた、方法上の参加主義」とは、より地域連携活動に即していうなら、地域の歴史遺産がどういう諸関係の中に置かれているかを可視化すること、そしてその中で自分の役割について考えること、といえるだろうか。「当事者性」は本人の自覚や心構えといった心構えの次元の問題ではなく、自分の位置を諸関係の中に見出すという営みと不可分である。そしてそこに、自分を含む人々の「自立」を実現する活動（多様な依存関係の展開）と「当事者性」の問題（そのような関係の中にいる私という認識）の接点があるように思える。

＊

中村氏の文章からは、研究や開発が「当事者性」を失ったことに対する強い危機感が感じられる。また、氏は明確には述べていないが、新自由主義的な自立論の蔓延と当事者性の喪失との間には、関連を想定することもできるだろう。

このような事態に対して、参加型開発は「自立」と依存の関係のとらえ直し、「よそ者」の「当事者性」の目覚めを促す活動を目指そうとしている。改めて考えると、このような課題は大学の地域連携活動においても当てはまるのではないかと思う。研究室から一歩出て、お互いの「自立」を促す関係に思いを致し、自分自身も新しい依存の関係を構築していく。そしてその中で当事者としての自分を見つめ直す。

考えてみれば、地域連携事業を大学教育に導入する意図もここにあったように思う。中村氏が提示した「自立」と「当事者性」という考え方は、地域連携の意義をわかりやすく解きほぐしてくれるような気がする。

註

（1）中村尚司「当事者性の探求と参加型開発――スリランカにみる大学の社会貢献活動――」（斉藤文彦編『参加型開発――貧しい人々が主役となる開発に向けて――』日本評論社、二〇〇二年）。なお、参加型開発の概要については同書所収の斉藤文彦「開発と参加――開発観の変遷と「参加」の登場」「参加型開発の展開――今日的意味合いの考察――」参照。

（2）本論では触れられなかったが、中村氏は論考の中でスリランカのコロンボ大学で高等教育を受けた若者の就職難対策の一つとして、彼らを農村と自治体と大学を結ぶファシリテーターとして採用したことを紹介している。この点も大変興味深かった。周知の通り、日本でも大学院生が自分の能力を活かせる職に就くことは、益々困難になりつつある。この就職難の問題は、大学院生の救済、あるいは学術の振興という観点から語られることが多い。しかし、中村氏の紹介を読んでいると、大学院生の教育には当然税金も投入されているわけで、彼らの能力が社会のために活用されないのは、損失というほかないのではないかという気がしてくる。高等教育の成果としての人材をどう活用するか、そういう観点からオーバードクター問題をとらえ返すことができないだろうか。

（3）小島直子『口からうんちが出るように手術して下さい』（コモンズ、二〇〇〇年）。

（4）このような「自立」のとらえ方は、内田樹氏の指摘とも通底するところがある。内田氏は、リスク社会（＝社会の不確実性が増し、個人にとっては将来の生活予測可能性が低い社会）をどう生きるかを論じる中で、次のように指摘する。

リスク社会を生き延びることができるのは「生き残ることを集団目標に掲げる、相互扶助的な集団に属する人々」だけです。ですから、「リスク社会を生きる」というのは、巷間言われているように、「自己決定し、その結果については一人で責任をとる」ということを原理として生きることではまったくないのです。「自己決定し、その結果については一人で責任を取る」というのはリスク社会が弱者に強要する生き方（というよりは死に方）なのです（『下流志向――学ばない子どもたち・働かない若者たち』講談社、二〇〇七年のうち、一〇二頁）。

ここでいう「相互扶助的な集団」は、中村氏のいう「依存」する関係と同義であるといってよいだろう。